

「アマチュア人形劇」の概念を考える

藤原 玄 洋

[川尻泰司記念日本人形劇研究所事務長／
日本ウニマ・アマチュア委員会委員長]

前年版『05 日本の人形劇』の「座談会：人形劇団体の視点で日本の人形劇を語る」の中で、アマチュア人形劇団と職業人形劇団の関係や、どうあるべきかについて、活発な意見交換がなされました。紙数の関係で、ほとんどカットせざるを得なかったのは残念でしたが、この記事を読んだアマチュアの何人からか、意見が寄せられ、あらためて関心の高さに驚きました。

これをキッカケに、日本ウニマのアマチュア委員会も、具体的な活動を始めることになったことは、思わぬ収穫でした。また、ウニマの運営しているメーリングリスト「pPunch」で、「アマとプロの定義について」活発な議論が交わされるということもありました。

◆ プロとアマの区分する客観的基準はない

「pPunch」において、茜崎あきら氏の以下のメッセージから議論は始まりました。

さて先日、ある人形劇人たちの集まりで人形劇のプロとアマチュアの違いについて話題となり議論が沸騰しました。

「アマチュアは、もっとプロを見習

え」とか、「アマチュアには、プロにない良さがある」などと言う声をよく耳にしますが、そのアマチュア人形劇人とは、プロ人形劇人とは、どのように定義したらよいのか、アマチュア人形劇人とプロ人形劇人とはどう違うのだろうか。

というようなことで大いに盛り上がりました。

プロとアマの区分については、よく議論に出される問題です。結論からいってしまえば、「プロを宣言した人(団体)がプロで、それ以外はアマチュア」ということになります。日本ウニマ(国際人形劇連盟)では、人形劇年鑑を発刊する過程の中で、上記の基準を採用することになっています。

この問題については、客観的な基準を探すことは、不毛の議論でしょう。スポーツの世界では明確なように一見みえますが、オリンピックの例でみるように、結局は客観的概念を構築することはできませんでした。

その証拠に競技団体ごとに、アマチュア規定は異なったものになっていますし、テニスや、野球、バスケットのなどのように、商業的に早くから確立されたジャンルでは、もは

や区分分けすることを放棄してしまっています。現在では、オリンピックは、技術の高さを競う大会というかたちに落ち着きつつあります。

◆技術もしくは芸術性のレベルで区分するのか

人形劇の世界においても、1960年代にアマチュアとプロの間に、熾烈な議論が展開されましたが、結論を得ないまま議論は尻すぼみになってしまいました。

人形劇技術や、芸術性の高さをもって、プロとアマを区分するのには無理があります。当時もアマの側から強い反発がありました。

「アマでも高さを目指している団体もあるし、実際、プロよりレベルが高いところもあるのだ」と、反論されたのです。

では、収入を得ているかどうか、あるいは人形劇で生活をしているのはどうかで、区分するという考えはどうでしょう。一見、これで区分できそうですが、小説家の例をあげてみると、駆け出しで1円の収入を得ていないプロの作家もいますし、アマチュアの作家であっても、依頼を受けて謝礼として原稿料を受け取る作家もいます。

その結果、プロの団体は「職業的専門劇団」という言葉を編み出し、長く使われていた時期が、最近まで続いていました。この言葉には違和感があります。私は、1970年代の初めからプロ劇団は「職業人形劇団」と呼ぶべきと、繰り返し主張し続けてきました。最初は、プロ劇団の人たちに、感覚的に受け入れがた

いと、ずいぶん抵抗があったように思います。

「職業」という言葉から「金もうけ」というイメージを連想し、芸術性を目指す人形劇集団にとって、金銭を対価にして人形劇活動を行っていることに、精神的な根強い反発があったからです。しかし、この10年の間に、「職業として人形劇を選択している」という考えを、自然に受け入れることができるようになったからだと思っています。それは、プロの人たち自身が、「職業人形劇団」という言葉を使うことがめずらしくなくなったからです。

この拙文の中では、表記が長いということもあり、「職業人形劇団」を「プロ」、「アマチュア人形劇団」を「アマ」と表現してあります。

◆入場料をとるかどうかで大議論

アマが謝礼をもらうべきかどうかについても、特にアマチュアの人形劇団にも、こだわりがあるようですので、以下に私の考えを述べたいと思います。

1979年、岡山大学で人形劇部の部長であった私は、早いうちにこの問題に直面しました。以来、ずっとこの問題については、考え続けています。

当時、70年安保のまっただ中で、大学は政治的活動をする学生たちによって、長期にわたって占拠・閉鎖されていました。独立した建物であった部室の出入りは自由でしたが、教室のある校舎には立ち入ることができず、学内で人形劇の上演活動をすることはできませんでした。

そこで、自分たちの活動を学外の市民に広くアピールすることを提案したのです。県立文化センターのホール(約 400 席)を、会場費を払って借り受け、自主上演を計画したのです。

あわせて、財政的には、部費での上演はむつかしいので、入場料をとって会場費の一部に充てるという提案をしたのです。自主公演については全員が賛成して、やろうということになったのですが、わずか 200 円の入場料をとってやるかどうかで議論になりました。部員の大多数は、アマチュアである自分たちが入場料を取るのをおかしいということで大反対でした。

反対の理由は、「自分たちの人形劇は入場料をもらうレベルに達していない」「アマチュアが入場料を取るのをおかしい」という 2 点です。

◆アマチュアが謝礼をもらう根拠

そこで、私は以下の考えを展開し、何日にも渡る長い議論の結果、部員全員を説得しました。

「私たちが入場料や謝礼をもらうのは、作品上演の対価としてもらうのではない。まして、作品のレベルに対して、支払ってもらうのではない。私たちは営利を目的とした団体ではないが、私たちアマチュアの人形劇活動を理解してもらった上で、活動を援助または支持してもらうために、人形劇を作るために必要な費用の一部を援助してもらうのだ」

しかし、プロの人たちの中には、アマチュ

アが低額の謝礼をもらって活動することへの反発に、根強いものがあります。職域を荒らされてはたまらない、という心情からでしょう。これは、日本だけでなく、2000 年にブダペストの国際ウニマ大会で開かれたアマチュア委員会でも、ヨーロッパの委員から、同様の意見が出されました。ちょっと、だらしないんじゃない?と思われる方もいるかもしれませんが……。

ここで、もうひとつ確認しておきたいのは、「非営利」という言葉です。あるいは「ボランティア」という言葉です。これらは、概念の違う言葉なのに、同義語として本来の意味を無視して使われているように思います。

まず、非営利は、ノン・プロフィットで、営利を目指さないという意味で、無償で公演するという意味ではありません。反対語は営利で、フォー・プロフィットです。非営利がアマで、営利がプロと考えているところに大きな問題があります。日本のプロ劇団の現状でいえば、ほとんど——すべてといっていーくくらいの団体が、実態は非営利団体です。法人格をとるために、便宜的に株式会社や、有限会社を名乗っていたとしてもです。財団法人になるには、あまりにもハードルが高いから、便宜的に営利法人になっている場合がほとんどです。(近々、NPO 法人とは別枠で、簡単に取得できる非営利法人格を新設する法律が準備中とのこと)

営利の概念は、収入から経費を引いた余剰金を、分配するということです。つまり、出資した株主(人)に対して利益の一部を配当・

分配するということです。非営利は、余剰金を分配しないで、余剰金のすべてを活動の再生産に回すという意味です。

したがって、日本のプロ劇団は、利益が出たとしても配当という形で、株主に還元するという可能性は、まずないので、実態としては非営利団体です。アメリカからビルボードという調査会社を使って、日本の非営利人形劇団の調査にきたときも、日本の特殊性として充分考慮するよう強調しておきました。

非営利団体(NPO)の構成員に、報酬が支払われたとしても、そのことで営利団体ということにはならないのです。この点では、アマもプロも、実体的には同じということになります。通常、アマ人形劇団の構成員に報酬を払うということはありませんが……厳密にいうと宴会したりするのは報酬にはなりません。

「ボランティア」という言葉も、「奉仕」と訳されて使われているので、「無償」と同義語として使われているようですが、ボランティアには、本来そのような意味はありません。もともとは、「志願兵」という意味ですから、ちゃんと給料をもらって働いています。徴兵制で割り当てられたわけではなく、自分から手を挙げて参加していることが尊敬される根拠になっているのです。

ちょっと、面倒くさい議論になりましたが、「非営利＝奉仕」ではないと理解頂ければ充分です。

◆ レベルが高くないとプロではないのか

職業劇団なのだから、芸術性が高くなけれ

ばダメとか、レベルが高いのが当然と、よくいわれます。もちろん、ぜひ、目指してもらいたいものだと思います。

おそらく、プロはプロフェッショナルなんだから……という意味に引きずられているのだと思います。しかし、目標と実態との乖離は、概念を区分けするときには、意味を持たないのです。

職業ということで考えると、洋服屋のことを考えてみれば、わかります。ブティックのような店もあれば、何でも 300 円という安っぽい店もありますし、普段着ではいるには、ちょっと気が引ける高級店もあります。高級店が、プロなののでしょうか？ 物は大したことないかもしれませんが、何でも 300 円で作って、消費者に値段以上の満足感を与えるのも、立派なプロの仕事ではないのでしょうか？

英語には、「目的としての人形劇」という言葉があります。人形劇には多様な活動があります。「芸術性」だけが、唯一の目的ではありません。教育だったり、識字教育だったり、セラピーだったり、安価な料金の娯楽だったり、交通安全の腹話術なんてのもあります。プロにもいろいろあるのです。

特に、教育という面では、日本ほどたくさんプロ劇団のある国はありません。日本の一大特質だといえると思います。幼稚園や保育園で活動する劇団は、芸術性の低い、一段下の活動と見る向きもありますが、胸を張って世界に紹介すべきと私は考えています。質の高さという要素は、いろいろな物差しがあるのだと思います。

◆ 30 年活動を続けてもアマチュア

何度も経験があるのですが、「30 何年、アマチュアで人形劇をやっています」というと、欧米の多くの人形劇人は驚きます。「30 年もやっていて、どうしてプロではないのか？」と、聞き返されます。P of A(アメリカ人形劇人協会)の例でいうと、何年も人形劇をやるということは、プロと彼らは思っているのです。また、継続的に舞台上で人形劇を見せるということは、すなわちプロのやることで、アマチュアの人には考えられないと思っているようです。

爛熟した江戸時代の町人文化の影響を、今日もなお文化として持っている、日本の特質だと私は考えています。封建制の江戸時代では、プロの人形つかいになるということは、士農工商の身分外の差別民になるということであったわけですから、どんなに上達したからといって、身分を捨てて、プロになろうとは考えなかったでしょう。農村部でも、村座という形で生まれた伝承人形劇が、各地に多数残されています。山辺人形の故・西川房司氏は、下駄屋を営みながら、名人といわれても、プロになると芸が荒れるといって、生涯アマチュアを貫いた人もいます。

もちろん、現在のアマチュアの人たちが、このようなことを意識はしていないと思いますが、町人文化の影響を色濃く残しているのだと思います。

◆アマチュアのことを話してみませんか？

現在、アマ人形劇団は、2,700 以上あると

思われますが、おそらく、その 90%以上が、いわゆるお母さん劇団で、自分の子どもたちに見せるために作られた劇団です。そのため、プロの人たちから、向上心が希薄なのではとの批判を受けたりしますが、私は、アマの全部が上手になる必要があるとは考えていません。ちょっと、乱暴な意見かも知れませんが。

そんなわけで、他の人形劇を見て勉強したり、アマチュア全体の普及・発展のための組織活動を積極的に考えないグループもたくさんあります。しかし、意識しようとしまいと、社会的活動をしているアマチュアの活動について、時間をとって話し合ってみたいと思っています。そして、何かできることがあったら、ぜひやってみませんか？

ドイツの例では、年に一度、アマチュア・フェスを開催して、その中でアマチュア委員会を開催しているそうです。

今年、8 月の“人形劇フェスタいいだ”の土曜日の午前中に、会合を持とうと、アマチュア委員会のメンバーで、今考えています。

(2007.1.23)

『08 日本の人形劇』<日本ウニマ>掲載